

【愛知】2040年まで西三河南部地域を支えるべく発展的再構築を敢行-度会正人・安城更生病院病院長に聞く◆Vol.1

2021年7月30日（金）配信 m3.com地域版

西三河南部西医療圏で主に急性期医療やがん診療を担う、安城更生病院。地方改良運動の中で生まれ、いわゆる安城市の“市民病院”的役割を担い地域医療を支えてきたが、人口増加によって増え続ける医療需要に応えるべく、2022年まで発展的再構築と題した大規模な施設整備を進めている。高度急性期医療、がん診療、災害医療などを強化し、さらなる進化を遂げるための、新棟建設や既存棟改修について、病院長の度会正人氏に詳細を聞いた。（2021年7月1日インタビュー、計2回連載の1回目）

▼第2回は[こちら](#)（近日公開）



安城更生病院病院長 度会正人氏

——安城更生病院の成り立ちについて、また西三河南部西医療圏の中でどのような役割を担っているのか教えてください。

1930年代に農業恐慌が起こり貧しく飢えていた農村を救うべく、「農山漁村経済更生運動」が起こりました。農政家の山崎延吉も農村改良に取り組み、その一つとして病院を創設し、1935年、更生病院が誕生しました。“安城更生”という通称で親しまれ、その後、2002年安城市の多大な支援のもとで現在の場所に新築移転し、正式に安城更生病院に改称したのです。

当院は西三河南部西医療圏に位置し、当医療圏の他の医療機関とともに、約70万人の急性期医療を支えています。このエリアは自動車などの産業が活発であり若い人も多いことから、人口は減少傾向になく、2040年まで現状維持、2045年まで微減にとどまると予想されています。また、安城市には市民病院がない一方で、「健(けん)幸(さち)都市安城」を掲げて公衆衛生や保健、医療の分野にも力を入れています。こうした中で、当院に求められる役割もますます大きくなっていくと考えていました。

——安城更生病院の新棟建設と既存棟改修を含む発展的再構築は、どのように発案、計画されたのですか。

2012年に前病院長が「院長と語る会」という、職種を問わず数多くの職員と忌憚のない意見を交わす取り組みを始めました。そこで現場の声を聞くことで、現状のハードでは足りていない部分が多いと改めて気付かされました。2002年の移転新設時から、2040年には全面改築などが必要となることを見据えていましたが、半分の期間に相当する2020年を目安に再構築が必要だと判断しました。2014年に再構築のための検討会を発足させ、再構築の詳細を検討してきました。病院幹部で泊まりがけの合宿を行って、病院の将来像についてとことん話し合ったこともあります。

——病院のハード面での課題とはどんなものですか。

とにかく床面積が足りない、という状況でした。これからの医療需要に応えるための設備を導入する場所が足りない。2002年にこの地に移転した当時は、将来は外来患者が減り、入院患者が増えると予想していました。しかし、外来患者は年々増加し、手術件数の増加も顕著で近年の手術数は年間8000件を超えることもあり、移転当初と比べ倍増

しています。がんはもちろん、脳心血管系疾患、国内ベスト5の分娩数を誇る周産期など、幅広い分野で需要は増加の一途をたどりました。

そこで2015年に手術室を増やしましたが、未だ十分とは言えません。がん診療に関して言えば、外来での内科治療スペースも常に余裕がなく、地域がん診療連携拠点病院としての機能を果たすうえで難しい場面もありました。また、集中治療病床についても手狭になっていると感じていました。さらに、Patient Flow Management (PFM) を取り入れ、入退院の支援も行いたいと考えていましたが、十分なスペースがなく新たな取り組みも困難でした。こうした課題を解決するために、発展的再構築を決めたのです。

——具体的にどのような再構築を行うことになったのですか。

再構築には三つの柱があります。一つ目は高精度放射線治療センターの新設です。放射線治療は手術、化学療法と並ぶがんの3大療法の一つです。過去には重篤な副作用を伴いやすく、末期に選択される手段でしたが、近年では副作用も少なく、根治や苦痛の除去に大きな効果を発揮しています。以前より1台の放射線治療装置を使っていましたが、同センターに最新の高精度放射線治療装置であるサイバーナイフS7、ラディザクトX9（最新トモセラピー）を導入しました。日本中で、この最新鋭の治療装置を2台とも最新型で導入している施設は、現在当院以外にもう1カ所を数えるだけです。（2021年3月現在）

設備があるだけでは有効な治療はできないので、組織・人材面も改革しました。放射線科を放射線診断科と放射線治療科に分けて役割を明確化し、経験豊富な医師と医学物理士を新たに採用しました。充実した設備とがん治療に注力する当院の姿勢に共感してくれた優秀な方々を迎えて、2021年6月にオープンしました。

二つ目は新棟の建設です。地上6階建ての新棟を増設することにより、さまざまな診療機能の拡大、効率化を図ります。1階には現在の健診センターを拡大移転し「予防医療センター」としてリニューアルします。メニューを増やし、女性専用エリアも完備するので、幅広い層に気兼ねなくご利用いただけると思います。2階にはがんの化学療法（抗がん剤治療）用のスペースである「通院治療センター」を拡大移転します。抗がん剤治療を外来で受けることが一般的になったことで治療件数が増加し、患者さんにもスタッフにも窮屈な思いをさせている現状ですが、拡大移転により26床から43床に増加し、余裕を持った運用が可能になります。

入院病棟となる3～5階には、循環器血液系疾患の治療のため、血管撮影と手術を同時に行えるハイブリッドラボおよびCCU（冠疾患治療室）を増設、抗がん剤治療のためのクリーンルームを大幅に増設する血液腫瘍内科病棟を移転し、高度急性期医療を担う病院としての機能を高めます。また新棟には、大規模災害などの万が一の事態を見据え、緊急時にベッドとして使用可能なソファや医療ガス配管を配置しております。こちらの新棟は、2021年12月から稼働予定です。

◆度会 正人（わたらい・まさひと）氏

1985年名古屋大学医学部卒業。2020年4月より安城更生病院病院長。日本内科学会認定内科医・指導医。日本循環器学会専門医・評議員。日本心血管インターベンション学会名誉専門医。名古屋大学臨床教授。名城大学臨床教授。

【取材・文・撮影＝鈴木満優子】

